

衛生通信

9

今月のテーマ：洗浄の妥当性確認

今回は、衛生管理を行う上で特に重要な洗浄の方法と妥当性確認についてご紹介します。洗剤・洗浄剤は正しく使用することで効率的に汚れを落とすことができます。しかし、間違った方法で洗浄をしようと思うような洗浄効果が得られません。正しく理解し、清潔な厨房を保ちましょう。

洗浄の目的

洗浄の目的は施設・設備及び環境を清潔に保つことです。

- ・1つ目は残渣を洗い落とすことにより異物混入のリスクを減少させること。
- ・2つ目は洗浄対象物の微生物を物理的に除去することにより洗浄対象物や調理品の菌数を減少させること。
- ・3つ目は残渣や多くの微生物が残存しているとそれが障害となりアルコール製剤が深部まで届かず、除菌効果が低下してしまうため洗浄することにより殺菌効果を増大させること。

汚れに適した洗剤・洗浄剤を使用する目的

調理環境により発生する汚れは様々であり、主に食物由来の汚れ（油脂、炭水化物、タンパク質）やホコリ・手垢のようなその他の有機汚れ、スケールやサビなどの無機汚れなどがあります。それぞれの汚れに適した洗剤、洗浄剤を使用することによって洗浄効率が大きく増加するため、汚れの原因が何であるかをしっかりと見極め、適切な洗剤、洗浄剤を選定することがムダのない洗浄を行う上で非常に重要になります。

	変質していない	変質している
食物由来の汚れ	油脂	アルカリ洗浄剤
	炭水化物	アルカリ洗浄剤
	タンパク質	塩素化アルカリ洗浄剤
その他有機汚れ	ホコリ・手垢	弱アルカリ洗浄剤
	色素汚れ	漂白剤（塩素系、酸素系）
無機汚れ	スケール汚れ	酸性洗浄剤
	金属跡・サビ（メタルマーク）	

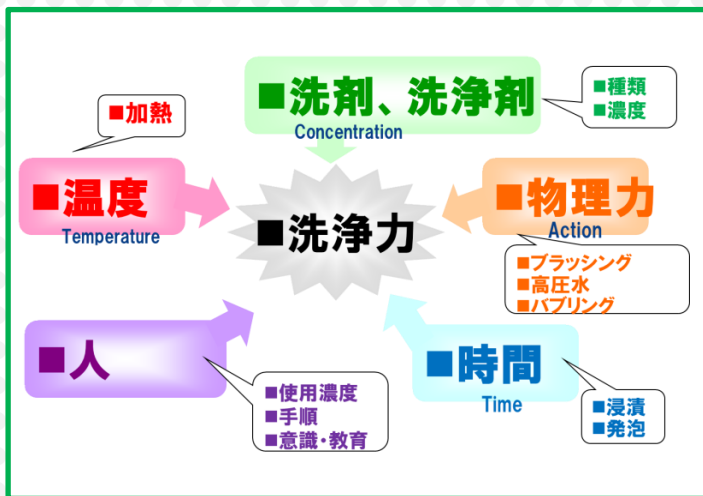


■ 洗剤・洗浄剤の選び方を誤ると？

例えば、まな板に付着している肉の汚れ・油汚れの洗浄が目的であるのに漂白剤を選択すると汚れが落ちないばかりか、汚れ（たんぱく質の汚れ）の性質が変わってしまい、ますます汚れが落ちにくくなってしまいます（※この汚れは塩素配合の発泡洗浄剤では、よく落とすことができます）。**汚れを適切に落とすには、汚れに適した洗剤・洗浄剤を使用しましょう。**

洗浄力を決める5つの要素

洗浄力を決める要素としては、汚れに適した「**洗剤、洗浄剤**」を選定するだけでなく、こすり洗いなどによる「**物理力**」や洗剤、洗浄剤に触れている「**時間**」、洗浄の「**温度**」が決め手となります。これらの要素が複合して最終的な洗浄力として汚れに作用します。ただし、洗浄を行う「**人**」が洗剤、洗浄剤の使用濃度や手順を誤ってしまうと、効果的な洗浄力は期待できません。そのため衛生標準作業手順書等を作成し、洗浄作業を行うスタッフに対して教育やトレーニングを行うことが必要です。そして、そのスタッフが洗浄作業を正しく行えているか力量の確認、評価をすることも忘れずに行うことが重要です。



洗浄力を決める5つの要素

モニタリング及び洗浄の妥当性確認方法

衛生標準作業手順書を作成しても、日常洗浄において清浄度が確保されていないことがあるため、表1のような記録表（モニタリング例）を作成し、洗浄後に期待される清浄度になっているか評価する方法を決めて確認することが重要です。評価方法は目視、細菌検査、ATP検査など求められる清浄度に応じて異なります。**特に食品に直接触れる箇所については、汚れの残留による細菌の繁殖やアレルゲンの残留、洗剤の残留などに対して厳しい基準を設けて管理をします。**

検査箇所は具体的に						
拭き取り箇所	2024年8月					
調理機器・器具 調理設備	ATP	細菌検査	洗剤 残留	油脂・ でんぷ ん残留	アレルゲン (タンパク残 留)	判定
調理室 スライサー	17	-	-	-	-	○
調理室 包丁	491	2.0×10 ²	-	-	-	△
調理室 盛付台	3,592	4.0×10 ³	-	-	+	×
調理室 ザル	157	1.0×10 ²	-	-	-	○
調理室 まな板	26	-	-	-	-	○

表1.記録表（モニタリング例）

器材名	用途・目的	メリット	デメリット
環境拭き取り 細菌検査	微生物レベルで の清浄度確認	細菌による汚 染状況が把 握できる	結果が出るまで に時間がかかる
残留タンパク質 検査キット	タンパク質検出	すぐに結果が 出る 費用が安い	アレルゲンその ものの検出では ない
ATP検査キット	ATP (ADP,AMP) 検出	数値で分かる	初期費用がか かる 検証箇所が多 いとコストがか かる
油脂・でんぷん 検出試薬	油脂、でんぷん 汚れの残留確認	色で分かる 取り扱いやす い	定性である (汚れ度合を 測れない)

■ 妥当性確認時の注意点

洗浄後の効果確認をするための方法

評価方法の選択については、洗浄箇所によって目的にあった確認方法を選定し、最適な頻度で、適切な操作で行えるように設定します。**特に洗浄の目的にあった評価方法を選ばないと、検査コスト・時間のムダとなるので注意が必要です。**